

令和 2 年 5 月 11 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02005

研究課題名(和文) ユーラシアン、アメラジアン問題とアメリカ合衆国一キリスト教系諸団体の介入の歴史

研究課題名(英文) The Issues of Eurasians and Amerasians in Japan and the United States: History of Christian Interventions

研究代表者

小檜山 ルイ (Kohiyama, Rui)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：70186782

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、北米出自の宣教師事業関連の資料、および、日本で発効された和英字新聞記事を主に収集した。それらの解説と検討を通じ、第2次世界大戦以前のユーラシアン(混血)が、日本でどのように描かれていたのか、さらに、ミッション・スクールをはじめとする宣教師による事業は彼/女たちの育成、教育にどのような役割を果たしたのかを明らかにし、また、個別的事例をつかむことができた。ユーラシアンは婚外子がほとんどだが、その経験は親の経済的状況や地位により左右された。また、第2次世界大戦後のアメラジアン問題は、戦前におけるユーラシアンの立場や彼/女たちへの社会人認識および対応と連続性があることもわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代のグローバル化は、国際結婚等の増大を伴い、異人種、異民族間に生まれる人を増加させている。「混血人」のアイデンティティや差別あるいは特別視は、国家統合、グローバル社会のいずれの構築を目指すにせよ、現代社会が向き合わざるをえない課題である。本研究は、日本における「混血人」の歴史的来歴を明らかにすることにより、この現代的課題の理解を深めようとする。第2次世界大戦後のアメラジアンについては、社会問題、歴史的経験としてある程度の知見がすでにあるが、それ以前の混血(「ユーラシアン」)について知られることは少ない。本研究はその知見の欠落を埋め、「混血人」についての歴史的理解の幅を広げるものである。

研究成果の概要(英文)：With an aim to understand "Eurasians" (mixed blood people) in Japan before WWII, this project has built up a collection of related primary materials of American missionary undertakings in Japan as well as Japanese and English newspapers issued in Japan before WWII. Through the reading and examining of these materials, the project has clarified how "Eurasians" were reported and described in the newspapers and how mission schools and other missionary projects intervened into the issues of "Eurasians" by adopting or educating them. The project has also succeeded in identifying a few concrete experiences of "Eurasians" in Japan and thus in examining their life courses. Although most of their parents were not married formally, the experiences of "Eurasians" varied according to their parents' status and finance. The knowledge that the project has provided suggests that the "Amerasian" issues in Japan after WWII were partly constructed in reference to the preceding "Eurasian" issues.

研究分野：アメリカ史、日米関係史、女性史、キリスト教史

キーワード：ユーラシアン 混血 宣教師 キリスト教 日米関係 アメラジアン 現地妻

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、大航海時代以降のヨーロッパ諸国のアジア進出と支配について、ジェンダーの視点に立つ研究が盛んに進められ、白人男性とアジアの有色の女性との親密な関係、そこに介入した白人女性等がどのように白人の優位性を確立していったかが明らかにされつつある。この文脈で、白人男性とアジアの有色女性との間に生まれた子供、ユーラシアンの処遇や役割が明らかにされつつある。

(2) (1) の研究動向は主にヨーロッパ対アジアという文脈で進んで来たのに対し、アメリカとアジアの関係においては、主に第2次世界大戦後の米兵と現地人女性との関係、そこに生を受けたアメラジアンの問題が注目されてきた。日本においても、「混血」というとまずアメラジアン問題が想起される。また、アメラジアンは、沖縄等における現代的問題として関心を集めてきた。

(3) 現代におけるグローバル化の進展に伴い、国際結婚等が増え、混血の人々の数は増加しつつある。彼/女らのアイデンティティの問題は、今後の国家や国民の統合、あるいは、国際社会の構築の有り様に大いに関係する現代的問題である。

2. 研究の目的

本研究は、1-(1)、(2) の状況に照らし、まず、ユーラシアンを第2次世界大戦以前に西洋人とアジアの女性たちの間に生まれた子と定義し、その問題を日本とアメリカの関係に引きつけて考察することを目指した。具体的には、日本において、ユーラシアンはどのような形で存在し、アメリカ合衆国出身の人々は、この問題にどう関わったのかをまず明らかにしようとした。このことは、第2次世界大戦後の日米間におけるアメラジアンの問題(1-(2))をユーラシアンの問題に接続して理解することにつながる。換言すれば、アメラジアンの問題群に歴史的視野を与えることになる。

3. 研究の方法

(1) カリフォルニア大学バークレー校図書館が所蔵する日本で発行されていた英字新聞(Japan Weekly Mail, Japan Chronicle, Japan Times)および、朝日新聞のデジタル・リソースを使用し、1871年から1941年までの間のユーラシアンに関する新聞記事、さらに、戦前の数種類の日本語の雑誌に掲載されたユーラシアン関係の記事を集め、日本に於いてユーラシアンがどのような存在として報道、構築されてきたかを把握した。

(2) 横浜におけるユーラシアン救済のために1871年に女性宣教師3名を日本に派遣したニューヨーク市の婦人一致海外伝道協会(Woman's Union Missionary Society)に注目し、同協会に關係する資料を集め、読解した。

(3) 宣教師によるミッション・スクールがユーラシアンの受け入れに積極的であったことを発見したので、具体的事例の収集に務めた。

(4) 第二次世界大戦後に主にアメラジアンを対象とした国際養子縁組で一定の役割を果たしたパール・バック財団に注目し、同財団に残る資料を収集、解読に努めた。

4. 研究成果

(1) まず、3-(1)の方法によって、これまでほとんど知られることがなかった、戦前の日本におけるユーラシアンの輪郭、概要を明らかにすることができた。

いくつかの事例は、日本におけるユーラシアンの命運が、父親の経済力、彼らの母親と子供に対する処遇により大きく異なることを示している。白人男性と日本人女性の関係において、日本人女性は、家事使用人として白人男性の家に入り、実質的に妻の役を勤めることが目立つ。正式な結婚は少なく、母子の立場は社会的にも経済的にも不安定で、経済的困窮に至ることも稀ではない。父親はイギリス、ドイツ、中国出身が多い。中国人と日本人の間に生まれた子はユーラシアンの定義から外れるので、今回は検討外とした。

この構図の中で、ユーラシアンに関する新聞、雑誌報道は、彼/女らのライフコースについて、主に、教育、仕事、犯罪、貧困等についての情報を提供している。教育は、父親の経済状況、子への関心に応じて、家庭教師をつける場合、外国人集住地区(居留地または、かつての居留地)において外国人が開く小さな私立学校に通わせる場合がある。父親の経済力が許せば、後年故国に送り、教育を仕上げた。居留地で宣教師が経営するミッション・スクールは、様々な立場のユーラシアンを積極的に受け入れた。孤児として引き取る場合と親に頼まれて学ばせる場合があった。ある新聞記事は、関東では暁星、関西では関西学院、神戸の英国ミッション・スクール(現在の聖ミカエル国際学校)、神戸女学院、松蔭女子学院といったミッション・スクールを主なユーラシアンの受け入れ先として挙げている。ただ、カトリックを含め、他のミッション・スクールでもユーラシアンの養育や教育に関わっていた事例はある。

ユーラシアンの職業については、新聞の求人欄が主たる情報源である。男性は、会計係、事務員、速記者、タイピストとして国際貿易に携わった。女性は、タイピスト、家庭教師、アマ

(白人に雇用される子守り、家事使用人)として働いた。語学教師(主に日本語、英語、ドイツ語)は男女ともに可能性が開かれた職業であった。ユーラシアンは主として外国人のコミュニティで仕事を見つけていた。ただし、芸者、落語家、歌舞伎役者、オペラ歌手となったユーラシアンに関する報道もあり、ユーラシアンが広い意味での日本の娯楽産業に活路を見いだしていた可能性もある。

新聞報道は、ユーラシアンの貧困と犯罪について多くを伝えた。殺人は少なく、ほとんどは詐欺、窃盗、強盗、暴力といった軽犯罪であり、その原因に貧困があることも報道から判断できる。1920年代以降、ユーラシアンの不良少年・少女の報道が増えた。戦時には、ユーラシアンにスパイの嫌疑がかかった。

ユーラシアンは居留地とその周辺の特定地域に結びつけられた。横浜であれば、鷺山、西竹之丸、大神宮山である。

収集しえた事例から判断する限り、ユーラシアンの結婚相手は多様であった。「純粹」日本人、「純粹」白人ともに結婚相手となりえ、ユーラシアン同士に結婚が限られるということではなかった。戦前の日本におけるユーラシアンの数はコミュニティを形成するほどのものではなかったためと考えられる。

1871年から1941年までの日英両語の新聞報道を時間的推移という観点から分析すると、1870年代、80年代には、ユーラシアンの報道はほとんどなく、見えない存在であった。ただし、80年代に一度だけ、英字新聞にユーラシアンは日本人が責任を持つべき問題だという意見が掲載された。西洋諸国の慣習法(売春婦の子は、誰が父親か特定しにくいので、母親の子とする)に則った主張と考えられる。1890年代以降になると英字新聞では、外国人コミュニティにおけるユーラシアンへの差別が問題化された。1920年代、30年代には、日英両紙面において、ユーラシアンの身体的な美しさやセクシュアリティへの関心が示された。同時期、日本語新聞では、不良少年・少女としての報道が目立つ。一方、1930年代には英字新聞でのユーラシアンによる求職広告が増え、彼/女らにとっても失業が大きな問題があったことがわかる。1939年以降の報道では、日本軍の東南アジアへの進出に伴い、日本人が現地でユーラシアンを「発見」した様子が伝えられた。

ユーラシアンへの差別について新聞報道を検討してみると、外国人コミュニティでは上に言及した外国人が開く小さな私立学校や居留地のクラブからユーラシアンを排除するといった明確な差別があったことがわかる。そのような差別は少なくとも1920年代まで続いた。ある英字新聞は1908年にユーラシアンとは、「何処にも属さない」、「愛国心に欠ける」存在であり、その出生は望ましくないとの議論を掲載した。

日英両新聞に共通した差別は、犯罪を犯した場合、ユーラシアンであることが明記された点である。

日本人によるユーラシアンに対する差別は、新聞報道では抽出しにくい、「あいの子」という侮蔑的な言葉の使用例はあった。ユーラシアンの作家大泉黒石は、「違い」を指摘するという形での差別が日本人の間に日常的に存在したことを指摘している。

一方、ユーラシアンが有能で、名声を勝ち得た場合、日本語、あるいは、日本人による英字新聞は大々的に「日本人」として報道した。週刊誌、月刊誌を素材として検討してみると、日本人は混血民族であり、人種の混淆は、白人と黒人のようにつけ離れた人種間の場合を除き、人種を向上させるといった「科学的」言説がいくつも紹介されている。これは、明治初年に日本人男性は白人女性と結婚し、日本人を改良すべきだと論じた当時の知識人一森有礼や福沢諭吉等一の意見に通底している。ユーラシアンに対する日本人の見方は、両義的で、状況に左右されるものであった。

(2)3-(2)の方法については、WUMSが発行した雑誌 *Missionary Crumbs*、*Missionary Link*、定例会議の議事録、手紙等、日本に関連するものはできるだけ収集した。しかし、残っている書簡は少なく、雑誌や議事録の記録では、WUMSが横浜居留地で運営したピース・コテッジ(ユーラシアンの収容施設)の全容を把握できるような資料は見つからなかった。

それでも、1871年から91年の20年間、WUMSは横浜で、主にa)ピース・コテッジ、b)女学校、c)路傍伝道活動と婦人伝道師の養成を主に行い、この3種は互いに関連していたことがわかった。すなわち、a)で養育された子供は、日本にはカースト制度が存在しないため、ある程度の年齢でb)に移されることがあり、c)の活動では、船乗りのための「節制会館」訪問等を通じて、買春の抑制が図られた。

明治初期に横浜に駐屯した英軍、仏軍が1875年に撤退すると、横浜に長期滞在する白人男性と日本人女性の内縁関係(上述のように、日本人女性が召使いとなる場合が多い)が、主たるユーラシアン出生の背景となった。この場合、ピース・コテッジでの養育費は父親に請求された。養育費が払われない場合は、最低5年間預けることを約束させ、宣教師が長期にわたりa)で養育するだけでなく、b)で養教育を行い、母校教員等に育て上げることをめざした。

ピース・コテッジでは、1891年に閉鎖されるまでに、毎年平均約25人の子供を抱えたが、上のような営為を通じ、1891年には収容人数が6人まで減り、閉鎖に至った。ピース・コテッジに居たユーラシアンのその後について、多くの事例は得られなかったが、海外に養子に出された例、アマとして雇用された例、WUMSの女学校(横浜共立女学校)を終えて他教派のミッション・スクールの教員になった例を見つけた。最後の例はエイミ・コーンズ=山田千代であり、

本研究で唯一生涯の軌跡が追えたものである。

この研究における成果の一つは、WUMS の日本におけるユーラシアンへの取り組みが、同協会のインドにおける経験に大きく依拠していることがわかった点である。WUMS はインドのコルカタにおいて、主にユーラシアンを対象とする女学校を運営していた。同協会が横浜に宣教師を送ったのは、そもそもその経験を買われてのことであったし、実際のピース・コテッジの運営には、当初インドでの経験を持つ宣教師が携わった。4-(1) で日本軍が東南アジアに進出した際にユーラシアンを「発見」したことが報道されたことを紹介したように、ユーラシアン問題は、西洋の支配、あるいは、進出の及んだ南アジア以東のアジアのほとんど全土にわたる問題だったのであり、その処遇に対する情報は、特に白人の間では国際的に流通していた。植民地支配が成立しておらず、支配者としての白人が被支配者としての現地人との区別を明らかにする必要は必ずしも存在せず、その意味でユーラシアンを差別する動機は弱いはずの日本においても、白人コミュニティでユーラシアン差別が根強かったのは、他地域での差別意識が反映されたものと考えられる。今後、日本におけるユーラシアン問題を考える際には、インドをはじめとする他地域におけるユーラシアン問題を積極的に視野に入れる必要がある。そのため、代表者は、オランダでインドネシアのユーラシアンについて下調べと取材を行った。

また、(1) と (2) のプロジェクトを通じ、日本におけるユーラシアン問題へのアメリカ人の関わりとは、ユーラシアンの父親としての関わりというより、ヨーロッパ系の男性と日本人女性の間にも生まれたユーラシアンの救済という形での関わりが主であることが確認できた。むしろ、これは、ユーラシアンの父親になったアメリカ人が皆無であったということではない。

(3)3-(3)の方法は、3-(1)と3-(2)の副産物として遂行したものである。たとえば、WUMS の事業と同じ横浜居留地にあるフェリス女学院でユーラシアンを受け入れた具体的事例が2件ある。また、未だ資料は得られていないが、カトリックの宣教師が運営した孤児院（横浜でマリアニストが経営した孤児院など）の多くもユーラシアンを対象としていたのではないかという感触を得た。今後の研究の見通しとして、居留地という空間とそこにあるカトリックも含めた伝道事業という枠組みを立て、1890年代までを視野に調査を行うことで興味深い歴史が把握できるのではないかと考えている。

(4)3-(4)の方法は、資料を集める段階に止まった。ただし、アメリカ人の日本におけるユーラシアン問題への介入は、彼/女らの「救済」を主としていたという、上に示した知見から、そのような介入の方式が、アメラジアン—この場合はアメリカ人男性と日本人女性の関係性にその根があるわけだが—の場合にも、一種の「伝統」として存在したことは見て取れた。国際養子縁組もかつて WUMS がユーラシアンへの対処として採択した方式の一つである。パール・バック財団は、国際養子縁組の推進という形で日本におけるアメラジアン問題に対処しようとした。バックは、一時澤田美紀とも親しく、エリザベス・サンダース・ホームとの関係は将来の研究課題となる。このプロジェクトは、当初ホルト・インターナショナルを研究対象とすることを考えていたが、同団体は主に韓国に介入したので、今回は途中からパール・バック財団に切り替えた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Rui Kohiyama	4. 巻 27-1
2. 論文標題 Women's History at the Cutting Edge in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Women's History Review	6. 最初と最後の頁 58-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Rui Kohiyama
2. 発表標題 Living on the Boarder between East and West: Mixed Blood People in Japan before WWII
3. 学会等名 International Federation for Research on Women's History（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Rui Kohiyama
2. 発表標題 The Mixing of Blood between the United States and Japan: "Eurasians" in the Pacific Context
3. 学会等名 International American Studies Association（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Rui Kohiyama
2. 発表標題 American Women Missionaries, Christian Homes and Romantic Love in Meiji Japan
3. 学会等名 A Talk Sponsored by Interdisciplinary Humanities Center（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Rui Kohiyama
2. 発表標題 Women in the Westerners' Community in Tokyo and Yokohama in Early Meiji Japan
3. 学会等名 International Federation for Research on Women's History (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----